街に開かれた「暮らし」の実験場

――下北沢・まちのばで見つけた新しい住まい方――

「一人暮らしに戻るのは、もう無理かもしれない」

インタビュー中、そんな言葉が印象的に響きました。私たちが今回訪れたのは、下北沢にあるシェアハウス「まちのば」。実際に中を案内していただき、代表の岩田健太さんにお話を伺う中で、単なる「安く住むためのシェアハウス」ではない、街と人、そして自分らしい人生が繋がる新しい暮らしのあり方が見えてきました。

立ち上げのきっかけは理想の「次」がなかったから

岩田さんがこの場所を始めたきっかけは、意外にもシンプルな「自分たちの悩み」でした。もともと小田急電鉄が展開する「シモキタカレッジ」という教育型居住施設に住んでいた岩田さんは、そこでの学びや交流に深い価値を感じていたそうです。しかし、そこを卒業するタイミングで直面したのが「次に住みたい場所がない」という問題。普通の一人暮らしに戻るのは寂しいし、かといって大型シェアハウスもしっくりこない。「だったら自分たちで作ってしまおう」と、少人数のメンバーでコンセプトを考え始めたのが「まちのば」の第一歩だったといいます。

交流を生むための「仕掛け」がある空間

今回、インタビューの前に居住エリアも見学させていただきました。そこでまず印象に残ったのが、階段の掲示物でした。掲示物が住民の皆さんのコミュニケーションのきっかけになっていることがうかがえる空間が、玄関の次に必ず通る階段に広がっている点がシェアハウスならではの魅力が詰まっているように感じました。

そして、共有スペースの中心にある大きなキッチンも「まちのば」の特色の１つでした。普通の家なら壁際にあるはずのキッチンが、あえて真ん中に「島」のように置かれています。「食事の準備をしている時が、一番会話が生まれるから」という岩田さんの言葉通り、そこでは住民たちがコミュニケーションを取っている光景が自然と浮かぶような温かさがありました。

階段掲示物

２階　共有スペース

また、屋上テラスのエピソードも鮮明に記憶に残っています。屋上の開けたテラスで住民の誰かが「やりたい！」と言ったサウナやヨガのイベントなどを実際に開催していたそう。自分の興味関心を周囲の人たちを巻き込みながら形に出来る空間が存在しているというエピソードが新しい住まい方にとって重要なポイントなのではないかと思いました。

屋上テラス

どんな人が住んでいるの？

リクルートでバリバリ働く方やコンサルタント、さらには２５歳で銭湯の運営を継承した学生起業家まで、個性的で話を聞きたくなるような住人が集まっているそう。

入居者の多くが「本業以外のこと」を楽しんでいるという意外な共通点が特に面白かったです。広告の仕事をしながらコピーライティングを学んだり、副業にチャレンジしたり。見学中も、共有スペースに誰かの活動の形跡がさりげなく置かれているのを目にして、ここがただの寝床ではなく、何かが生まれる「アトリエ」のような場所でもあるのだと実感しました。

街との心地よいグラデーション

「まちのば」のもう一つの大きな特徴は、建物の一階、玄関の横の屋外にあるオープンスペースです。私たちが訪れた時も、外に向けられた「縁側」のような場所に椅子が置かれ、街に対して開かれていました。

ここでは、近くの住民が選んだ本を並べたり、住人の友人が初めての個展を開いたりしているそうです。岩田さんはこれを「暮らしのグラデーション」と呼んでいました。家の中か外かというゼロイチではなく、街の人たちがふらっと立ち寄り、住人と会話が始まる。下北沢という、新しく来た人を温かく受け入れてくれる街の文化が表れているようでとても印象的でした。

１階　まちの縁がわ

２周年を迎え、これからの「まちのば」

取材時、「まちのば」はちょうど２周年を迎える直前でした。それを記念して、岩田さんがずっと挑戦してみたかった「本づくり」に取り組み、２年間の記録を一冊の本にまとめる作業が進んでいました。そこには住人だけでなく、街の商店主の方々からのメッセージも詰まっていたことが「まちのば」がただのシェアハウスではないことを物語っていたように感じます。

岩田さんは、将来的に自分がライフステージを変えても、この場所を次の世代に継承していきたいと語ってくれました。「ビジネスというよりは、大人の趣味のような温度感」と言いつつも、そこには「自分たちの暮らしを自分たちの手で良くしていく」という確固たる意志が感じられました。

編集後記

大熊

家とは、ただ寝に帰る場所ではない。誰かとズレを感じながらも話し合い、折り合いをつけ、新しい何かを生み出していく拠点なのだと教わりました。
実際に中を歩かせてもらい、住人の方々が使っている食器や並べられた本を見ることで、住人の方々の生活の暖かさを直接感じることができました。「自分がどう住みたいか」から始めるまちづくりは、私たち若者世代にとっても、とてもワクワクする未来の選択肢の一つになるように思います。

取材にご協力いただき、ありがとうございました！